日本のダダ

神谷忠孝

著者略歴

昭和十二年、北海道帯広市生まれ。北海道大学大学院博士課程中退。中央大学助教授を経て、現在北海道大学教授。

主要著書

「横光利一論」（双文社出版）

「保田與重郎論」（雁書館）

「坂口安吾」（角川書店）

日本のダダ

昭和六十二年九月二十五日　印刷

昭和六十二年九月　三十日　初版発行

著　者—神谷忠孝

発行者—高橋哲雄

発行所—響　文　社

〒062　札幌市豊平区美園十一条四丁目二—二〇

電話　〇一一—八三二—七一四六

印刷所—山藤印刷株式会社

製本所—石　田　製　本

定　価—一、六〇〇円

©Tadataka Kamiya, 1987 Printed in Japan

ISBN4-906198-15-5 C0095 ¥1600E

日本のダダ

神谷忠孝

日本のダダ

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はじめに……8
一、ダダイズムとは……15
二、日本のダダ運動……22
(1) ダダイズムの日本への紹介……22
(2) 日本におけるダダ運動の展開……30
(3) ダダイズムの波及……41
(4) 「文芸時代」とダダイズム……46
(5) ダダイズムへの批評……54
(6) 昭和期の動向……57
(7) 戦後の展開—雑誌「ダダ」……65
(8) ダダ研究の現在……70
三、ダダイストたち……78
辻　潤……78
(1) 辻潤のダダ……78

（2）辻潤と女性たち……88
高橋　新吉……98
（1）ダダ運動と高橋新吉……98
（2）高橋新吉における「風狂」……109
吉行エイスケ……119
四、ダダの周辺……141
武林無想庵……141
生田　春月……149
島田清次郎……159
林　芙美子……172
坂口　安吾……180
吉行淳之介……192
五、資料編……208
（1）ダダイズム紹介の基本文献……208
享楽主義の最新芸術……208

ダダイズム一面観……210
ダ、主義とは何か……214
駄駄主義の研究……220
ダダイズムの正体……229
（2）アナーキズム系の雑誌一覧……235
六、日本のダダイズム参考文献一覧……238
あとがき……246

カバーデザイン――悠莉企画

日本のダダ

はじめに

日本のダダ詩は高橋新吉の「倦怠」(「シムーン」創刊号、大正11・4)にはじまるとされている。

倦怠

皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿
倦怠
額に蚯蚓這ふ情熱
　白米色のエプロンで
　皿をふくな
　鼻の巣の黒い女
其処にも諧謔が燻すぶつてゐる
　人生を水に溶かせ

冷めたシチユーの鍋に
退屈が浮く
皿を割れ
皿を割れば
倦怠の響が出る

この詩は「皿の詩」ともいわれ、いろいろなアンソロジーに収められているが、皿の字の数は二十個、二十四個とまちまちである。初出は二十二個であった。この詩を作るきっかけになったのは、日本で最初にダダイズムを紹介した「享楽主義の最新芸術」（「万朝報」大正9・8・15）の中に、「文字の組方が同じ頁の中に縦に組まれて居たり横に組まれて居たり甚だしきに至つては斜に組まれたりして居て、内容よりも外形に重きを置いて居るやうな傾向があるやうにも見受けられる」と書いてあるのをみて感激したからだと、高橋新吉は「日本のダダイズム運動」（「詩学」昭和38・5）で書いている。

この詩が単に西洋のダダ詩の模倣として書かれたのではなく、レストランでアルバイトをしていて、洗い場にもっていくために皿を重ねる労働の中から作り出されたということが大事である。底辺労働者の悲哀とアナーキーな心情が表出していることに注目すると、日本のダダがはじめからアナーキーな気分を内包していたことがわかる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

壺井繁治は『現代詩はどう歩んできたか』（創元社、昭和30・11）の「昭和篇（社会派）」で、この詩のもつ歴史的意味について次のように解説している。

近代社会が生みだした「倦怠」が主題となっているが、その主題のつかみ方、発想、語法は、「民衆詩派」の自由詩とも、またこれまでの象徴的な自由詩ともちがっている。すなわちその第一行には「皿」という文字が二十四も積み重ねられ、次行には「倦怠」という抽象語がぽつんと投げだされ、しかも視覚的に訴える「皿」という文字の積み重ねによって、次行の「倦怠」という抽象語はその重みを一切背負いこみ、「倦怠」そのものとしてのイメージをわれわれに強く刻印する。それは朔太郎の『青猫』に見られる象徴主義的倦怠（アンニユイ）にくらべて、おなじく内部心象を描きながらより現実的でより露出的だ。したがって朔太郎の詩に特徴的に見られる気分象徴にふさわしいメロディアスな、音楽的な言葉と右に引用した詩との間には、ひとつのきわだった断絶がある。それは単に新吉の詩にだけ見られる特徴ではなく、関東大震災前後から日本の詩壇に登場してきたアバンギャルド詩人に多かれ少なかれ共通する傾向であって、「民衆詩派」的な間のびした自由詩の否定や、上田敏以来の象徴詩との訣別は、神原泰や平戸廉吉を先駆とする大正末期のアバンギャルド詩人からはじまったのである。

詩のことはこれぐらいにして、日本のダダが総体的にみて何であったかということに目を向け

ると、石川淳の「ドガと鳥鍋と」（「文学界」昭和37・3）という文章に要領を得た見解がある。石川淳は上野の博物館で催されたルーブル展で、ドガの「取引所にて」という絵の前に人だかりがしているので近づいてみて自分も強くひきつけられ、その理由をいろいろと考えたあげく、それがどうやら「反芸術」という要素からきているのではないかという感想を述べたあと次のように書いている。

反芸術といふことも、作品を事件と見ることも、ことばはいろいろだらうが、今はじまつたことでなかつた。近いためしに、第一次大戦のあとにダダがおこつてゐる。今さらダダの説明でもあるまい。当時わたしはまだ年少、仕事にもなんにも、芸術の現場から遠いところにふらふらしてゐたが、しかしピカビヤは気に入らないものではなかつた。わたしは精神……とまではいはない、青二才の生活感情に於ていくぶんはダダのはうに傾斜しかかつたやうなおぼえがある。それでも、ダダの波のあとに置きざりをくつた貝殻の一かけらになつたやうなおぼえはない。今おもへば、それはわたしの個性の抵抗が波をおよぎ抜けたなんぞといふ後生楽なはなしではなくて、当時のダダは、すくなくとも日本にまでおよぼした余波のかぎりでは、青二才の生活を巻きこんで行くだけの力すら欠けてゐたといふことになるだらう。よわいエネルギー。はたせるかな、ダダはつひに事件にまで至らないうちに、はなはだ日本化された浮浪現象としておのづから流れ去つた。かういふのは、わたしが後日になつて往年のダダを踏みたふしてゐ

るためではない。反対に、芸術上の可能を遠望させることに於て、ダダは当時の日本の芸術にむかつて発明奨励の掛声といふぐらゐの栄養学的刺戟はあたへたのではないかと、わたしは今日なほ高く買ひかぶるはうにかたむいてゐる。

ここに石川淳の文章を掲げたのには理由がある。つまり、従来のダダの扱い方が近代詩史、近代絵画史の一コマとして処理されがちであったが、現代文学史の中に分け入ってみると、ダダの波紋は詩や絵画にとどまらず小説の方にまで及んでいたという事実の裏づけになると思えるからである。

具体的には昭和文学の起点となった新感覚派文学の文章革新は、それまでの自然主義的リアリズムへの挑戦としておこったわけで、ダダの影響は無視できないのである。さらには、昭和初年の新興芸術派についても、従来の新感覚派の亜流という見方では不充分である。「エロ・グロ・ナンセンス」という新興芸術派の特徴も大正末期のダダ運動の延長上で考えることで、そのねらいとしたところがみえてくる。ダダ運動に参加した最年少の吉行エイスケが、昭和に入って詩から小説に転じ、龍膽寺雄とともに新興芸術派の旗手と目された時期があったことも注目してみる必要がある。

杉山平介の「ナンセンス文学検討」（「三田文学」昭和5・6）は井伏鱒二や中村正常をナンセンス作家と命名した当時のジャーナリズムにひっかけて風来山人やエドガ・アラン・ポオなど東

西の文学にみられるナンセンスをひきだしたおもしろい文章で、その中に次のようにある。

ナンセンスはナンセンスだ。無意義だ。背理だ。それが故に真実なのである。

近頃流行の堅苦しい「合理性」、厳粛な緊張面、悲壮面、さういふものが或程度に持続すると、次第に真実性を失つて、堪え難い偽瞞的なポーズとして我等の感性を圧迫してくる。その時、最もナチユラルにナンセンスに対する渇望が爆発する。

私はダヾイズムを統一的傾向の、補助的な一翼として解してゐるものであるが、同じやうにナンセンスに対する我等の要求を、合理的運動の補助的な一翼と解するものである。すなはち、そこに無用の用を認めるものである。

ここでダダイズムが視野に入っていることに注目すると、昭和の新興芸術派の一部、あるいは牧野信一や坂口安吾の文学、特に安吾の「FARCE に就いて」(「青い馬」昭和7・3)における文学観もダダイズムあたりに源流があることが確認できるのである。さらには石川淳、坂口安吾、太宰治などの文学的出発にどのようにダダイズムが作用したかをさぐることによって、いわゆる「無頼派」「新戯作派」との関連があきらかになってくると思われる。

高見順や原民喜、評論家の青柳優などが若い時代にダダイズムに傾倒したのはよく知られていることだが、それが作品の中にどういうかたちであらわれているかということも興味ある問題で

ある。ひとつの見方として、昭和前期を見舞った十五年戦争下で、かろうじて文学精神を保持し得た文学者たちには、石川淳や坂口安吾、高見順などの作品にみられるように、諧謔と韜晦を駆使しての文学的抵抗がみられること、その底流にダダの影響があったということもできるのである。

戦後文学における前衛運動は花田清輝や安部公房によって推進されるのだが、そこにもダダの精神は生き続けており、サルトル、カミュの思想が実存主義文学というかたちで戦後文学にひとつの流れをかたち作るに際しても、ダダの復活が認められる。吉行淳之介が同人誌「葦」三号（昭和22・12）にG・リブモン・デセーニュの「ダダの歴史」（岡田弘訳）を載せたことは吉行文学とダダを考えるうえで大事な要素である。尾辻克彦（赤瀬川原平）が一時期ネオ・ダダの運動をおこしたことも含めて、戦後文学にダダがどのように生き続けているかということも考察に値するテーマである。ひとまず、日本のダダ運動の基礎的な検証というかたちで、本書を世に問うてみる。

一、ダダイズムとは

1

一九一六年、スイスのチューリッヒではじまったダダ運動から五十年目に、雑誌「本の手帖」五十八号（昭和41・10）は〈特集・ダダ50年〉を組んだ。そこに寄せられた諸氏の見解を通して、ダダとは何かについて整理してみよう。針生一郎は「ダダと現代」で、ダダが絵画、音楽、映画などの分野で脈々と生きつづけていることを確認したうえで、トリスタン・ツァラやフーゴー・バルの文章から、次のような見解をひきだしている。

大戦前のベル・エポックに生れた立体派、未来派、表現派などには、多かれ少なかれ機械文明の進歩と都市生活の変化にたいする、オプティミスチックな肯定がつきまとっている。アポリネールは機械文明と合理精神の背後に明るい虚無をのぞきこむことによって、この時期の代表的な詩人となった。だが、ダダには近代的なもののすべてにたいする、懐疑と反撥が底流している。かれらは過去の呪縛をたちきったばかりでなく、未来にむけての進歩の観念を否定し、純粋な現在にたちむかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.